

# 統

# 一

財団法人

統一團發行

## 次 目

遺文に於ける五大要義(五).....	本多日生
開目鈔講話(第四十六講).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十八).....	河合陟明
宗教と道德.....	本聖院
記事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

昭和十八年十二月二十七日 第三編 第五百七十四號  
 昭和十八年十一月一日發行

號月一年八十四第

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經  
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ  
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク  
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對  
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向  
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ  
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ  
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母  
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出  
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會  
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ  
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ  
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ  
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ  
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精  
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超  
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行  
シ來レリ  
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

本團畧則

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者  
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進  
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ  
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン  
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ  
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第  
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮  
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起  
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ  
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日  
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲  
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一  
ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ  
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛  
此等ハ統一團ノ標語ナリ  
定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文  
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永  
久ニ持續セントスル本團事業ノ實質ハ  
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ  
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法  
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ  
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文  
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ  
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ  
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ  
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」  
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參  
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ  
ラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五  
圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金  
貳圓五拾錢ヲ提出セラルル方ヲ正團員  
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ  
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ  
無料ニテ頒布ス
- 隨友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ隨友トス

遺文に於ける五大要義 (五)

本 多 日 生

四、諸法の實相

次に諸法の實相といふことに就いてザツと考へて置かなければならぬ。諸法實相といふのは宇宙觀  
と言つて、天地に現れて居るすべての物に就いて言ふのであるが、この天地宇宙を眺めた場合に、一  
切の物は始め無く終り無く續いて行くといふことをハッキリ承知しなければならぬ。何物も無い所か  
ら出來て來るといふものは一つも有り得べきものではない、隨つて在りし物が無くなるといふことも  
斷じて無いのである。その頭腦がハッキリせぬ間は眞理といふものは了解することは出來ない、一  
切諸法は生ぜず滅せず、すべての物は一物と雖も無い所から新しく生ずるといふことは無い、一物と雖  
も在りし物が無くなるといふことは無い、一切が不生不滅本有常住といふことを説いたのが佛の教で  
ある。それが廣大なる眞理であつて、一切の眞理の總元繩になつて居るものである。  
さうして一番非眞理な事は「本無今有」といふことである、本無今有といふことは、本無かりし物

がたゞ幻の如くに今だけ有るといふことである、だん／＼進つて行けば消えてしまふ、幻のやうなものである。眞の實在の物は本有と言つて、本から有るといふことでなければ常住實在といふことは言へない。基督教の世界觀の如きは、無かつた物が途中から出来て来たといふのであるから、無論本無今有の説であつて、そんなものは問題にならぬ譯である。阿彌陀様でもその通りで、本は無かつたもので途中から出来て来たものであるから本當の尊さは無いのである。法華經の壽量品に於ては佛も無始久遠、我等の魂も無始久遠と言つて、始め無き以前からあるのである、それを日蓮聖人は「開目鈔」に、

九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はる

と書かれて、始め無き以前よりの相互の存在といふことを明かにした、それが哲學の實在論といふ、物の存在を説明するところの大きな法則である。だから本無くして今有るといふことになる場合には、どんな物でも壊れてしまふ、無かつた物が有ると言ふ、化物みたいなものであるからそれは遂に破壊されてしまふ。本無今有の物は遂に消滅に歸する、生ずる物は必ず滅する、始め有る物は必ず終り有り、こつちの端があると言つたならば、どの位長くても必ず向ふの端があると言はなければならぬ、圓を描けば、どんな短い紐でも、圓になつて居れば端といふものは無いけれども、如何に長くとも一方に端があつたならば必ず他の一方に端がある。だから本無今有といふ失があるといふことは、

法華經を信する者に於ては他の非眞理の思想を破る第一の秘訣である、基督の世界觀も本無今有の失あり、阿彌陀如來の安養世界も、無かりし所に阿彌陀如來が建立したといふから本無今有の失ありといふことになる。壽量品の顯本來ない佛教の説明は皆本無今有の失あり、佛様といふものが始めより存在するといふことを明して居らぬから、法華經の迹門と雖も本無今有の失ありといふことになる。その意味合は「十法界鈔」といふ大事な御遺文の中に

迹門には但是れ始覺の十界互具を説いて未だ必ず本覺本有の十界互具を明さず、故に所化の大家能化の圓佛皆是れ悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何んぞ免かるゝことを得んや

とある、迹門の教と雖も本無今有の失に陥つたものは取るに足らぬというて、日蓮聖人はチャント壽量品の尊さを説かれたものである。さういふ所に話が這入らないで、それから以下の所でまごついて居るものは法華經の議論にはなつて居ないのである。法華經を妙法と謂ふ、その妙といふことは本無今有の失と離れて居る所に於て妙といふことが言へるのである、有るかと思へば消えてしまふといふやうな物は妙とは言へない。妙法を蓮華に譬へてあるといふのは、蓮華は如何にも不思議なもので、因如果如と言ふ（或はこれを因果同時とか、俱時とか、不二とか言ふ）因の如く果の如し、因果が一つになるといふことになつて居る。それはどういふ事かといふと、人間の考の低い者は第二の原因を説いて第一の原因を説かぬといふので、例へば茲に卵がある、「これはどうして出来た」と言つたら

「鶏が産んだ」と言ふ、「あゝさうか」でわかつたやうなつもりで居るけれども、「その鶏はどうして出来た、卵から孵出たのではないか、して見れば親ではないか」、「イヤその卵は鶏が産んだのぢや」、「その鶏は卵から孵出たのぢや」、「どつちが先か」、「それはわからぬ」その位の所で大抵の人間は済して居る。一切の諸法に於てその問題があるのである、茲に梅の木がある。「梅の木はどうして出来た」、「梅の實から出来た」、「梅の實はどうして出来た」、「梅の木になつたのぢや」、「どつちが先だ」、「どうもわからぬ」といふことになる。併し一切の諸法といふものは因と言ひ、果と言はれるけれども、それが因であると同時に果である。米なら米を、秋の收穫の方から考へたならばこれは實がなつたのぢやと言ふ、併し來年これを播く方から言へばこれが種になる、米一粒は實でもあり、種でもある。人間でも子供と親といふ關係はやはりその通りである、子供が大きくなつて子供を産むといふのはどういふ譯であるか、子供が子供を産めるものではないけれども、親が子供を産む時分に、所謂子供の内に親になるべきものを加へて産んで居るから、これが大きくなつて子供を産むことが出来る。子が大きくなつて子を産むのではない、親を加へて與へて居るが故に、やはり何時も子を産んで居るのである。子であるならば決して子を産むことは出来ない、といふことが生理學的にも進化論の上に於ても、嚴重に研究されて居ることを見たが、これは面白い事だと思ふ。

さういふ理窟で宇宙のすべての物に就いて確かりと研究して見たところが、どつちが親やらどつちが子やらそんな事はわからぬ、子も實在、親も實在、ズツと始めの本に戻せば卵もあつた、鶏もあつたといふことにしなければならぬ。鶏はあつたけれども卵は無かつたとか、卵は有つたけれども鶏は無かつたとか、さういふ譯のものではない、十界の諸法悉く實在して居るものである。だから卵も無始の鶏に具し、鶏も無始の卵に具すると言はなければならぬ、始め無き卵と始め無き鶏の存在といふことを認めなければならぬ。それをたゞ卵の方が鶏の本ぢやとか、イヤ鶏が卵の本ぢやとか、ツイワイ言うて居る、そんな妄想を打破して進んだ所に法華の哲學的真理といふものがあるのである。日本人はまだ一般に思想が低いものであるから、哲學などといふと特別な學者がやる事のやうに思つて居るけれども、哲學的に説かなければ本當の真理といふものにならない、今卵と鶏の話と同じになつてしまふ。世間の話では「イヤ鶏が卵を産んだのだ、鶏の方が親である」、「そんな事はあるまい、卵から孵出たんだらう、卵の方が親ではないか」といふやうな所であからすにまごついて居る。哲學といふものはそれを兩方とも本當に批判研究して行くから、これはどつちが先だといふことは言はれぬといふことを發見することが出来るのである。

法華經はそこまで突止めて尊き教が立てられて居る、それが諸法實相論の中の「本無今有の失あり」といふ日蓮聖人の語になつて居る。殊にそれは佛様に就て言ふので、今の親の問題である、子供が大きくなつて親になるとか、子を産むとかいふことは、親の性質を有つて居らなければならぬ、子供に親

の性質がなければ何時まで経つても子供である、六十歳になつてもデン／＼太鼓をやつて居る譯だけれども、だん／＼大きくなるとデン／＼太鼓を捨て、國が大事であるとか、教化が大事であるかといふやうなことを言出す、親のやうになつて又子を産んで行く、そこが面白い所である。どこ迄行つてもデン／＼太鼓を叩いて居つたならば仕様がなない。その佛様に就いての本無今有の失を脱したものは、壽量品の釋尊の顯本の教より外ないのである、阿彌陀様ぢや、お薬師様ぢやと言つても、そんなものは皆本無今有の失ありといふことで、一振りに振り落されてしまふその根本の、如何なる哲學的批判の中にも動かない、絶對の哲學的價値を有つたものが壽量品の教となつて居る。だから一切の宗教の中に壽量品なくんば天に日月無きが如く、人に神無きが如しと日蓮聖人が言はれるのはそこである。その事が諸法實相論の中に於てイキナリ考へられなければ駄目である、諸法實相論もたゞ擴がつて續が弛んだやうな事を考へて、「佛様の事など言ふのはそれは又別な問題だ」といふやうな考へ方は、法華經の諸法實相論ではない。それは「觀心本尊謗」に

十界久遠の上に國土世間既に現はる  
と書かれて、今申したやうな意味合が最も大事な諸法實相論となる譯である。(此項畢)

# 開目鈔講話

(承前)

小林一郎

夫攝受折伏と申す法門は水火の如し。火は水を厭ふ水は火を惡む。攝受の者は折伏をわらふ。折伏の者は攝受をかなしむ。無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前とす。安樂行品の如し。邪智謗法の者の多き時は、折伏を前とす。常不輕品の如し。譬へば暑き時に寒水を用ひ、寒き時に火を好むが如し。草木は日輪の眷屬、寒月に苦を得。諸水は月輪の所從、熱時に本性を失ふ。末法に攝受、折伏あるべし。所謂惡國破法の兩國あるべき故也。當世

は惡國か破法かを知るべし。

折伏と言つて人の間違ひを打破つて正しい道に入れるといふやり方と攝受と、いふ人の善い事を認めて優しくこれを導いてやるといふこの二つの仕方といふものは一緒には出来ない。ちやうど水と火のやうなもので、人を責める必要のある時には飽迄責めなければならぬ。又或る場合の善い事を認めて獎勵してやる必要のある時には、飽迄これを獎勵してやらなければならぬので、兩方ゴチャ／＼やつた日には教といふものの價値はない。だから火の必要なこともあり、水の必要なこともある。ちやうど水と火のやうなものである。火は水を厭うし、水は火を惡む。攝受をして居る者は折伏をわらふ、『わらふ』といふことは大變面白い、わらふといふのは場合を知らないから、そんな事をしては駄目だぞと言ふ。馬鹿

にしてわらふのではない。どうしたつて世の中の不正な者をその儘にして置いてはならないのに、マア／＼許してやれと言ふ人間があればこれをわらふ、お前の考は足りない、慈悲といふものはそんなのが本當の慈悲ではないのだ。その人の間違ひを打破るといふのがそれが本當の慈悲だ。斯ういふやうにして攝受をやる者をわらつてその智慧の足らないことを教へてやるのであります。これが攝受をわらふといふことであります。

それから攝受をする、人の善を認めてこれを獎勵してやるといふことを主にする必要のある場合には、折伏といふことを悲しむ。これは悲しいことであります。人を責めて人の過ちを算へるといふことは嬉しいことではない。出来るだけしない方が宜い、已むを得ずしてするのだ。それで攝受と折伏は場合に依つて違ふので、出来るだけ人を責めないで済めばこれに越したことはない。併し責めない爲に或は教が世の中に弘まらなければ、それこそ誤を揮つて人を斬るといふやうな心持で、その間違ひを責めるといふことも已むを得ない。それは場合に依る。「無智慧人の國土に充滿の時は攝受を前とす」人間が悪い事をするのに、まるで智慧が無くて何が佛の教だか解らないやうな人間が多くて、解らないから罪を犯すといふやうな者が大部分であるならば、攝受が良い、攝

受は優しく教を説いて、人間は斯ういふ風にした方が宜いと言つて軟かにやつて、さうして善い事をしたら、それは結構だ、モツとそれをやれ、斯ういふやうに優しくやつて行く方が宜しい、マアまるで何も知らない子供などを相手にするのは、初めから小言を言つては仕様がなから、心得を教へてやつて、さうして少しでも善い事をしたら褒めてやつて、それを獎勵してやるといふことが宜いでありませう。世の中を教へ導くのもやはりその通りであります。それはマア安樂行品の中にいろ／＼それに就いての心掛けが説かれてある。

それを違つて邪智誘法の者が多くて、智慧はあるけれども、それが間違つた智慧であつて、佛の正しい教に背いた行ひをするといふやうな者が世の中に多い場合には、已むを得ないから、折伏を先にして、その間違ひを打破つてやるといふことを主にしなければならぬ。常不輕品の如くである。「常不輕品の如し」といふ言葉は短い言葉だけれどもこれは非常に大事なことです。常不輕菩薩のことは法華經にありますやうに大勢の人間の間違ひを直してやる爲に骨折つたので、却つて自分が迫害を受けた、不輕菩薩が大勢の人の反省を促す爲に、お前は折角佛に成るべきところの尊い性質を有つて居りながら本當の修行をしない。そんなことでは仕様がな、善

薩の行、大乘の教を學びさへすれば結局佛に成れるのだから、本當に自分で振返らなければならぬぞと言つて、掌を合はせてその反省を促してやるといふと、相手の人は却つて腹を立てつて、不輕菩薩に向つて石をぶつかけたり、瓦をぶつかけたり、棒を持つて来て殴つたりした。けれども不輕菩薩は少しも怒らないで、その迫害の中を越えてやはりその教訓をし續けた。斯ういふのであります。だから折伏をするといふことはその心持でなければ出来な。人を憎んで責めるのでなくして氣の毒だと思つて責めるのだから、自分が責めた爲に相手が迫害して來ても、その迫害に對して腹を立てるといふことがあつてはならない、腹を立てるくらゐなら初めから人を攻撃しないが宜い。そこが違ふのであります。世間的の普通の場合に於ては、世間の人のやることを見ると、人を責める時には、怒つて、彼奴は憎い奴だ、怪しからん奴だと言つて怒る。怒るといふ心持があつては人の間違ひを直すことは出来ない。どんなに激しい言葉を使つても宜しい、場合に依れば頭の一つぐらゐ殿つても宜い、けれども怒つてはいけません。不輕菩薩が怒らなかつたといふことは非常に大事な事でありませう。吾々はどうも氣が短いから時々怒るけれども、怒つては決して人を教へることは出来ない。怒る時には自分の心が顛倒してしまふ、正しい分別がなく

なつてしまふ。だから怒つた時に言つた事やした事は、後で考へて見ると恥かしい事だらけでありまして、一つも正しい道に叶つて居ない。マア私などは時々さういふ後悔を致しますが、その時にはムツとして餘計な事を言つて、後になつて自分ながら何故あんな馬鹿な事を言つたりしたかと思ふ。子供に小言を言ふのでも、怒つて小言を言つたのでは決して育きはしない。小僧を一人教訓をするのでも怒つて小言を言つて小僧さんが決して成程と思ひはしない。それは主人だから目の前ではハイハイと言つて居るが、腹の中では何を言つて居やがると思つて居る、怒つてはいけない。だから日蓮上人も決して怒らない。「日蓮は泣かぬども涙ひまなし」ただ氣の毒だと思ふ。日蓮は聲を出しては泣かないが、涙のひまはない。皆氣の毒だ／＼と思つて涙を流す心持で皆を責めて居るのだと言つて居られます。少しも怒るといふ心持はない、ちやうど不輕菩薩が人に打たれても罵られても怒らなかつたその心持で人に折伏を加へるといふのが、それが本當の慈悲の心持の結付いた折伏でありまして、斯うして初めてその効果がある譯でせう。併ながら人間は怒らないといふことはなか／＼難かしいことでありませう。私共佛教を習ひ始めてから二十何年も経ちますけれども、なか／＼怒らないといふ修行は出来ないものであ

ります。人が怒つて居るのを見ると馬鹿々々しく見えるけれども、自分が同じ立場に行くとやはり怒る、縁日などへ行つて見ると餘程面白い、人に押されて「何をして居やがる、人を押しては困る」と言つて居ながら、自分が前の人を押して居る、變なものです、人のことは言へるけれども自分がその通りになつて居るのは何も解りはしないのであります。さういふことはよくある。それで不經菩薩のやうに怒りを發しないといふ調い、心持で、さうして言葉はどんなに激しくても人に折伏を加へて覺醒を促すといふことであるべきでせう。

これは場合に依つて違ふ。譬へば暑い時には水を用ひて、寒い時には火を好むと同じで場合に依つて違ふ。草木は日の光を受けて育つもので、つまり日の方のお陰を蒙るものが多いのだから月の出た寒い時には苦しい、冬の月夜などは草も木も葉が凋んでしまふ。水といふものは月の方に屬したもので、満月時には海の潮が満ちて來るといふやうな譯で、水は月の方の縁のものだが、暑い時には本性を失つて乾いてしまふ。

斯ういふやうに總てのものはそれぞれの性質があるから、末法の世に至つては攝受をして宜い時と、折伏をして宜い時とあつて、若し惡國破法の國があつたならば、惡國といふのは、國に正しい教が行はれないで、國の政

治家も正しい教を信じないで、却つて間違つた教を信じてこれに依つて一切の政治を立てるといふ國が随分あるだらうし、或は又場合に依れば何もかもまるで解らないで間違つた事をやつて居る國がある。二種ある。同じ悪いと言つても解らないので間違つた事のある國と、それから教を選んでもその選び方が間違つた爲に總てが狂つて來るのと、二種ある。だから能く見別けなければならぬのであつて、今の日本の國はどつちだ、何も解らないでうまく行かないといふ國か、それとも正しい教を依つて間違つた教を用ひた爲に世の中が亂れて居るのか、この二種の中のどれであるかといふことを能く考へて見なければならぬ。これを考へて見ると、日蓮上人の當時に於ては佛教は随分盛であつて、お釋迦様の眞實の教であるところの法華經を弘める妨げをする者ばかり多いのだから、これは教が行はれないのではない、教の選び方が悪いのではないか、それだからこの教の選び方はどうしたら宜いか、その正しい標準を教へる爲に日蓮は奮ひ起つて、諸宗の攻撃をして居る。決して他の宗を憎んで攻撃して居るのではない、佛教といへば日蓮上人の當時に於ては佛教は随分盛であつた、お寺も立派であるし、坊さんも澤山ある、だからそんなに一生懸命になつて力説しなくても、信心が大事だといふことは皆知つて居る

が、どう信ずるかといふ時になればその信じ方が間違つて居るから、その所を直して行かなければならぬ。斯ういふのであります。

ところが今の時代はどうです。今の時代は兩方やらなければならぬ。信心が大事だといふことを教へて行かなければならぬがこれが難かしい、今は信心といふことにまるで縁の無い人が多い、世間の大多数はさうでありませう。信仰ナンといふものはこんな忙しい時代に要りはない。斯う言ふのが多いのでありますから、今の時代に日蓮上人のなされた型をその儘使つて念佛や禪の攻撃をして居つてはいけません。今の時代に一番大事なことには信仰の無い者はつまらないといふことを徹底的に打込んで行く、それが本當に日蓮上人の魂を繼いで、日蓮上人の精神を活かして行く道に相違ない。

併ながら有體に言ふと、人に信仰を勧める者が自分が信仰がなくて何も出来はしませぬ。それで少し惡口を言ふやうですが、昔の書物を如何に讀んで、天台が斯う言つて、妙樂が斯う言つて、達磨が斯う言つたと言つて理窟ばかり捏ねて居て、たゞ理窟は解つても、佛の教を深く信ずるといふ心持の無い人は、法華經を弘める資格は無いと言なければならぬ。自分が本當に深く信じてさうして信仰の無い人の淺ましい生活を能く覺醒さして行

くといふことが第一義でなければならぬ。そこは時代に依つて違ひますから、能くお互が考へて見なければならぬだらうと思ひます。動もすると諸宗の教義ばかり列べて、所謂研究的な事を言つて居るけれども、お前何を信じて居るかといふとボンヤリして居る人が随分あるのであります。それでは法華經が世の中に弘まる譯はないでありません。そこで能くその所を考へて、その時代に應ずるところの信仰を勧めて行かなければならぬのであります。

問て云、攝受の時折伏を行すると、折伏の時攝受を行すると、利益あるべしや。

又更に問答を設けまして「攝受の時」即ち人を責めないで、大勢の人を包容してお互に教へて行く必要のある場合には、折伏をやつてそれで利益があるとは言へない。又折伏をしなければならぬ、大勢が間違つた信仰を世の中に弘めて居るのを直さなければならぬといふ場合に、それをしないで、攝受といふ優しい弘め方をして居つたのではやはり利目がなだらうと思ふが、その邊の區別はどう心得たら宜からうか。

答て云、涅槃經に云、迦葉菩薩佛に白して言

く。如來の法身は金剛不壞にして、而も未だ  
所因を知ること能はず云何。佛言く、迦葉能  
く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金  
剛身を成就することを得たり。迦葉、我護持  
正法の因縁にて、今是の金剛身、常住不壞を  
成就することを得たり。善男子正法を護持す  
る者は五戒を受けず、威儀を修せず。刀劍弓  
箭を持すべし。是の如く種々に法を説くも、  
然もなほ師子吼を作すこと能はず。非法の惡  
人を降伏すること能はず、是の如き比丘は、  
自利し及び衆生を利すること能はず。當に知  
るべし、是の輩は懈怠惰懶なり。能く戒を持  
ち淨行を守護すと雖も、當に知るべし是の人  
は能く爲す所なからむ。

答へて言ふのに、それは勿論のことであつて、折伏をし

こでどうも佛様の仰しやることは譯が解らぬから、自分  
連凡夫とはまるで境遇が違ふのだ。自分連とはまるで段  
が違ふのだから、解らぬのだから斯ういふ風に皆が疑ひ  
を起したのであります。

その時に迦葉菩薩といふ人が「この人は法華經の中に  
出て居るお釋迦様の直ぐのお弟子の迦葉といふ人とは名  
前は同じであります、全然別の人であります」その大  
勢聽いて居る中から進み出てお釋迦様に質問した。その  
質問が實に愉快な質問でありまして、迦葉菩薩が言ふに  
は「お釋迦様に秘密はないと思ひます」と申した。秘密  
がないと思ひますといふのは、皆の疑ひを破る爲です。皆  
が佛様と自分連と段が違ふから、自分連の解らぬ事を仰  
しやつたのだらうと思つてボンヤリして居る。そこで迦  
葉が言ふのに「皆が何だかお釋迦様の仰しやつたことは  
自分連と縁が無いやうな顔をして居りますが、私はさう  
は思ひませぬ、お釋迦様に秘密はないと思ひます。私共  
にお隠しになることはないと思ひますがどうでせう。お  
釋迦様は吾々に解らぬ事を言つて吾々を驚かすといふや  
うなそんな考はないだらうと思ひます。お釋迦様は吾々  
に解ることを仰しやるに違ひない、吾々に實行の出来る  
事を仰しやるに違ひないと思ひますが、この考は間違つ  
て居りませうか」と迦葉がお釋迦様に聞いた。それに面

なければならぬ時には、なまぬるつこい攝受のやり方で  
は教は弘まらぬ。それは涅槃經の中に詳しく言つてあ  
るから、その涅槃經の中の本文に就いてこれを説明して  
見よう。

涅槃經の中に迦葉菩薩といふ人がお釋迦様に質問した  
ことが説いてある。涅槃經は前にも申した通りお釋迦様  
の御入滅に先つてお説きになつたお經でありまして、こ  
の涅槃經の中で中心となつて居る問題は、佛様御自身が  
永遠の命を有つて居つて、いつ迄も朽ちないで滅びない  
で遺るところの大きな力を具へて居らつしやるといふこ  
とを實に徹底的に説かれた。それを説かれたものである  
から大勢の人は初め驚いた。お釋迦様は、今死んで行か  
れる。モウやがて自分は死ぬるぞと仰しやつて大勢の者  
が涙を流して別れを惜しんで居る時に、自分が死ぬとい  
ふのは今この肉身が死ぬだけであつて、本當に死にはし  
ないぞ、永久の命を具へて居り、永遠に自分の教も遺る  
し、自分のはたらきも世の中に遺るぞ、斯う仰しやるか  
ら聽いて居る方は解らなくなつた。死ぬと仰しやつたと  
思ふと死なないと言はれる。死ぬると仰しやるから吾々  
は別れを惜しんで泣いて居ると、泣くには及ばない、自  
分の命は永久にこの世に遺り、自分の力はこの世に遺つ  
て居ると言はれたので譯が解らなくなつてしまつた。そ

白い髻へを出した。あの人形を使ふ者が人形の腹の中に  
仕掛けをして置いて、こつちの方で紐を引張ると手が動  
いたり、足が動いたり顔が動いたり、頭が動いたりする。  
子供はその仕掛けが解らないから不思議だナと思つてび  
つくりして居る。人形使ひはさういふ事をして大勢人を  
集めて金を取つて商賣をして居りますが、佛様は人形使  
ひとは違ひませう。佛様はソツと紐を引張つて手を動か  
したり、足を動かして、儲けようといふ、そんなことは  
ないでせう。それを商賣にする人はその秘密を大事にす  
るけれども、佛様には秘密といふものはおありにならな  
いと思ひますがどうでせうか、斯ういふことをお尋申上  
げた。

そこでお釋迦様がお前の言ふことは尤だ、佛は十五夜  
の満月が空に在つて曇りなき光を放つて居ると同じで、  
誰も距てない。自分の信ずることをその通り説いて居る  
のだ。併し幾ら十五夜の満月が照して居つても、家の陰  
や山の陰に居る時にはその月の光は至らない、月が光を  
吝しむのではない、自分が物の陰に居るから月の光に當  
らないので、自分が月の差す所に出て来ればいつ迄も照  
してやる。それと同じことで、お前達が自分の考が足ら  
ないで、自分の小さい私に執はれて居るから佛の教が解  
らないのであつて、佛の方は教を吝しむといふこと決し



てない、だから誠心を以て佛の教を求めて自分の心の持を捨てて来れば佛の教といふものは誰にも解る。佛は一部分の人に知らせる爲に教を説くのではない。斯ういふことをお答になつた。

そこで迦葉菩薩は非常に喜ぶし、其處に居た大勢の人も考へた成程さういふものかナ……一通りお釋迦様の御趣意は解つた。けれどもやはり前の問題は解けないものでありますから、佛様と自分達とは段が違ふのかナ、佛様は自分達をお教へ下さるおつもりださうだけれども、私共には解らない。やはり段が違ふ、これをどうしようといふので、又疑ひが起つて、その大勢の疑ひを解決する爲に、迦葉菩薩は又皆に代つて質問した。それはどう仰しやつても佛様と吾々とは段違ひだと思ひます。併ながら佛様が今仰しやつたのは教を呑まない、吾々を佛様と同じにしてやると仰しやつたのでありますから、して見れば吾々と佛様と距てがあるのではなくて、修行の仕方が違ふのでせう、こゝに目を着けた。修行の仕方が違ふのだ、佛様と吾々とは根本からまるで違ふのではないでせう、佛様あなたは永い間修行なさつて、永い間善い事をなさつたその結果として佛にお成りになつたのでせう。吾々が今つまらぬ者で居るのは、修行すれば佛と同じになれるのだが、その修行が足らないから、つまらぬ

の良人に違ひない。吾々共だつたら何も譯が解らぬ。やめてしまへといふことになるのですが、これは何しろ菩薩でありますから、頭がしつかりして居るので、今申すやうな順序を追ひましてさうして佛様に對して質問を致した譯であります。

「如來の法身は金剛不壞にして」金剛不壞といふのは崩れない、滅びない、命も永遠の命だし、智慧も力も一切世の中に敵がないといふことを仰しやつたのだが、それは修行を積んだ結果だと思ひますが、その原因を知りたい、どうして佛にお成りになつたのでありませうか、この質問を出しました時にお釋迦様が仰しやるには「迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり」自分はこの世だけでなく、前の世からいろ／＼な境遇を経て來たのだ。要するに正しい教を世に弘める爲に力を盡したのだから、その力を盡した報いに依つて今は佛の世界に到達し得たのだ、斯ういふのであります。この前の世からの努力の結果がこの世に現れたといふ話は、今この涅槃經ばかりではなくして、法華經の中にもありますし、又今まで讀んで参りましたこの開目鈔といふ御書の中にもたびたび出て居ります。これがハツキリ捉まつて行きまして、初めて私共は失望もしないし、又解ける心持も起きない譯であります。

者で居るのでせうと思ひます。うまい所に目が着いたものです。そこで更に質問をした、それではこの事を打開けて話して戴かせぬか。佛様あなたはどうして佛にお成りになつたのですか、今は永久の命を有つて居て、永遠に朽ちない滅びないところの力を具へて居らつしやるが、いきなりさうなつたのではないでせう。そこへ行くまでどうして成れたのですか、斯ういふ質問を持出したのであります。お釋迦様のお言葉とこの迦葉菩薩の質問と相俟つてこの問題はうまく解決が附いて行かうといふのであります。

それだけを申上げて置くと、この涅槃經の本文が能く解る、それでないといふ本文がいきなり出て來ても解らない。それで迦葉菩薩がお釋迦様に伺つた。お釋迦様は自身は死んでも心は死なない、永遠にこの娑婆世界を護つて行くところの無限の力を具へて居らつしやるといふことであるが、それにはなか／＼この世の三十年や五十年の修行ではないでせう、昔の前の世からいろ／＼修行を造らした結果立派な徳を具へ、力を具へるやうにおなりになつたのだと思ひます、これに就いて自分達の教訓としてその事實をお話下さい、斯ういふ意味で質問をして居るのであります。だから説かれたお釋迦様も偉いが聴く方の弟子もなか／＼偉い。やはり迦葉菩薩といふ人は頭

若しさういふ事がなくてこの吾々の生涯の五十年六十年が吾々の命の全體だと思つたら、斯う言つて居る私共も嫌やになつてしまふ。マア自分達は今まで二十年も三十年も佛教をやつて居りますが、それで居て一向どうも覺れない。それはまさか泥棒や人殺しはしないけれども、心に省みれば恥かしい事はかりやつて居る。私は殆ど一日として佛教に關係のあるものを讀まない日といふものはありませぬ。かなり佛教の事は讀んだり考へたりして居るつもりであります。ところが恥かしいことでありませんが一向どうも結果が擧げられない。言葉ぐらゐる少しは知つて居りますが、まさか泥棒や人殺しをしないぐらゐるになつて居りますが、モウ私は六十歳を越えて居て、これから先何年生きるか判りませんが、逆も私は生きて居る間に佛に成れさうもない、菩薩の行の一つだに出來やうとは思ひませぬ。實際言へば恥かしいことでもあります。それだから若し私のこの修行といふものが——修行と言ふと鳥語がましいが——その結果が現れないならば、モウやるだけ面倒くさい、やめてしまつて、朝から美味いものでも食つて、美味い酒でも飲んで、いよ／＼いけなければ首を縊つて死んでしまへといふ氣になる。ところが佛様はそんな事は仰しやらない。(以下次號)

# 本佛實在の宗教哲學(十九)

河 合 陟 明

## 十五、本有體系における境智論の *quid jura* 根據(承前)

これ即ち、於個的我、照ニエシスの無我、義兼二蔽通二教、於我通達ノエマ的藥病、別教的分別我也、顯稱性自在妙用、圓教的眞妙我也、その稱性とは稱體ともいふべく、而して體性とは中道なり、妙用とは空假なり、ゆゑに眞妙望餘、本述觀也と妙樂が扶釋せるところの意味は、中道爲本、空假爲迹、義當體用、すなはち體用本迹を以て中道と空假二跡との關係を見るところの體本用迹となるのであつて、これを予は一般的に有體知用論(あるひは有本知用論)と呼び、而してこれを本佛論といふ極果の價值的 *quid facti* 事實論上にもちきたつては、即ち日生恩師の稱呼に順つて「事體と内智」と稱するのである。又さらに以て心觀心、觀心觀也とは、以三跡法性ノエシス、觀三跡法性ノエマ、換言すれば、唯就自己心心所、立我觀行也、すなはち我之觀行とは自覺の發展・完結をもたらさむとするの謂であるのである。けだし我とは實に自覺に外ならない。實在即覺自體としての超個人的純粹意識すなはち先驗的純粹自我が、無明的に働いては我執となり、自己自身の本性に順ふところの法性的に働いてはまさしく理性的自覺としての經驗的意識となる。即ち眞如理本覺の行佛性的事始覺化に外ならない、而してそれは必ず個體人格において實現しかつ完遂せられるものであつて、その無限なる發展の後における最後の完成を即ち佛陀と稱するのである。

しかしかく有が三跡の何れともなつて、有體知用論が成立つとき、その中道有體の内面的作用としての空諦的知用の要求するところの對象は、再び最初第一の中道有が第三に假諦有となつて、この要求に應ぜねばならぬのであつて、しかもその有としての實質容量は、まさしく本有不改ゆゑに覺了不改として不變であるといはねばならぬのであるか

ら——ただ包攝關係といふことより見れば、能所大小ありともいふべきであるが——ここにおいて本佛の境智論にはおのづから今一種の關係が、この事體內智論より派生的・發展的に展開することを知らるのである。派生とはいへ、しかもそれもまた知識の本質に達つた根本關係として成立つものである。即ち本佛の佛智はゆる絶對的統覺作用は、全宇宙の一切を認識し包攝し統一するところの能包者として、一切を自己の内面に有つ、一切を自己の無限大の鏡面に浮かべてこれを直接的に知るところのものである、これを本佛の大慧といふ、さきに事體に包まれるものとしては内智といひ、今、事體を包むものとしては大慧といふ、一の智が所と能と、小と大と、内と外と、いはゆる即狹通と寛廣通と、人格的と宇宙的との二様の關係に立つ、後者の立場にあつてはいはゆる平等大慧常照法界なるものである。このときにおいては十界事當の全體は悉く、したがつてその十界の中の無始の統一佛界たる本佛の事體そのものすら、本佛自身の大慧の内容となり對象となる。元來、人格の内容である知識そのものが、翻つてまた人格そのものを包んで、人格をも知識の内容とするに至るのである。しかし何れの場合においても人格性の觀念はいよいよ鮮かに發揮される。何となれば「事體と内智」といふときにおいては、事體といふ面に人格性の重心が位し、これに反し「大慧と事體」といふときにおいては、大慧といふ知識面あるひは意識面はゆる九識心王眞如の都たる極果極證面に人格性の支點が置かれる。さらにかかる果上における法報二身の境智の關係に對し、大悲といひ圓慈といひ本願といひ、または智悲を一括して智願といふ如き應身の關係が加はりきたるとき、本佛の人格性は一層鮮かにまた力強く、その色濃き緑りの色合を増すものとなる。(恩師、法華經講義、分別功德品の初、台當兩家における境智論)

今その根本關係がまづ無作の實在原理たる眞如において成立つのである。もちろん眞如智と本佛智とは全く同一といふのではない、前者より後者へ達するにはそこに無限なる歴史的知識が加はらねばならぬ。眞如智といふは根本智ではあるが單に超時間的なる三世不動の本體的知識たるにとどまる、それが本佛智となるにはそこにプラス無限なる現象的知識すなはち無始以來の法界實相の歴史的認識といふものが加はらねばならぬ、すなはち事の十界の無始以來の互具と常住と緣起と感應といふ事實に對する如是の認識・如實の知識が加はつて來ねばならぬ。ライブニッツのいはゆる *Veritas aeterna* 永久眞理と *Veritas da facti* 事實眞理と、すなはち本體智と現象智と、普通の實體とその無限の限定・無限の *modus* 様相としての體象二面の知識、歴史の不斷の根源と永遠に流動しゆく歴史的世界そのもの

との二面の統覚、あるは攝大乘論にはゆる如理智と如量智との二面を全うして理量不二・理量自在・理量双照双用なるものが、眞の佛智であるのである。いはゆる見三實相理二名了了、識三法界事一名三分明一也、(妙玄六上)而してかかる完全なる佛智への到達過程を示すものが、予のいはゆる佛性向覺として、法華經方便品における開示悟入の四佛知見であるのである。云く

一、道慧如理、見三道實性、實性中得、開三佛知見也、二、道種慧如量、知三法界諸道、種別解惑之相、名示、三、一切智知一切法一相寂滅相、理量不二稱悟、四、一切種智、種々行類相貌皆識、理量双照爲入、(文句十一)而してこの方向の極限においてつひに、然此眞性、遍於法界、迷謂三内外、悟唯一心、是故四眼二智、萬象森然、佛眼種智、真空冥寂——故成道時、稱此本理、一身一念、遍於法界、(止觀弘決五ノ二、三)なる佛果を成就するに至るのである。

かくて本有概念を總括的に考へるとき、元來本有の實在なるがゆゑに一切を本有し、従つて知るといふ本有の智をも本有し、またその智すなはち知ることの對象として知られるものをも本有する。本有の實在なるがゆゑにその唯一の本有實在そのものが、一方においては本有の智となり、同時に他方においてはその本有の對象となる、ここにおいては初め本有といふ實體の内容であつた本有が、却つて母胎であつた實體そのものを包むものとなる。かくして唯一の本有は一切の根本原理であり、充實原理であり、具足原理であり、圓滿原理であり、また開發原理であり演繹原理であり、導出・創造・生成發展原理であり、またつひにその完成原理であり、或はそのものとなる。予のいはゆる絕對的實在の條件たる四門は、悉く本有概念における先驗的無作のノエマ・ノエンス即ち境智の關係と、および本有・今有といふ先驗と經驗あるひは超時間と時間の關係と、さらに今有そのものの無限系列の上における本有古今の關係したがつて純然たる經驗界の範疇における一種全く新たな無始の本有と今有の關係との、一言にいへば畢竟ただ一の本有體系の中において悉く組織されることができるのである。大涅槃經における本有今無傷は、世親以來つとに着目せられ解釋せられ來つたが、確かに妙樂が法華文句記において

然此一偈、四處出之、古人名爲三涅槃四柱、亦云三出偈、故知釋不當理、涅槃室傾(記十四)といへるは背景に申るの言といふべきである。ゆゑに予の本有體系はまた實に佛教原理論として一大涅槃論の體系と

いふべく、ただししかし佛教建設論の歸結を取つて、換言すれば佛教全體の最大目的そのものを取つて、一言に本有體系と名くるものであるのである。けだし有の眞意義は佛においてこそ全きがゆゑ、有は佛となるがゆゑである。本有哲學においていかにかの(一)、事體理徳すなはち現象的實在論と、(二)、佛性向覺すなはち自働的決定論と、(三)、止觀法性および始本統覺すなはち批判的直證論ないし絕對的自覺論と、(四)、智願感應すなはち律法的恩寵論といふ、その一門ごとにそれぞれ又アンチノミイ解決的なる實體・生成・認識・救済の四門システムが示されるか、いかにこの四門が悉く本有今有といふ一系列の概念によつて統一的に簡潔に示されるかは、これも亦後述するであらう。

かくて本有概念の導出・演繹は、「有る・有らしめる・有つ・知る・知られる・有たれる・有らしめられる・有らしめられて有る」といふこととなり、かくて本有體系を一切の圓轉融通あるひは圓融循環原理ないし一切の開顯統一原理といふべきものなることを知るに至つた。本有なるがゆゑに本有それ自身が本有ともなり、本有の對象としての本有ともなる、智ともなり境ともなる、認識ともなり對象ともなる、知ともなり有ともなる。これ凡て實在そのものの内面的轉回である、即ち自覺的轉回である。何となれば實在は本來一覺自體なるがゆゑに、その内面的轉回といふはおのづから自覺的ならざるを得ない。しかしながらかく轉回するといふは勿論無明の働による、不可避的現實の所與たる無始の無明の媒介するによる、いはゆる眞知と無明との眞安和合なる共生ともいふべき關係によつて、ここに即ち因縁和合、乃至「諸法」のである。したがつて内面的といふもまた同時に外的なる社會的關係に入りこまねばならず、それを縁しそれを對象とせざるを得ない。觀不思議境・起慈悲心・巧安止觀といふ十乘觀法はあまなく十法界を縁するのである、ここにはゆる觀念と存在との辯證法的媒介としての行爲なるものが成立するのである。したがつて吾々が眞に十全なる自覺の充足すなはち寂智の完成によつて、始めて眞に人格を完成するものとしての、宇宙的實在の認識と體驗に達するには、かの眞如原理における有體知用あるひは中本空假道をなすところの、無作理門の本有と本覺との二面の間に、換言すれば互に形式となり内容となり、超越となり内在となり、能となり所となるところの、その二面の間に、間隙を填めんがために——この間にこそ無明といふのである——必ず道徳實踐としての歴史的時間の創造を要し、かつ遂にその全き完了と超越とを要するのである。ここに「行」といふ一種無限なる双曲線が加はりきたり、それが知と有との兩極に展開しつゝつねにこれを媒介し、その極限においてつひに唯一に合せしめぬ

ばならぬ。いはゆる實在は佛性であり、佛性とは性を時間的に融通して佛となるものである。換言すれば、佛性におけるノエマ的性は有の面を表し、ノエシスの佛は知の面を表し、この二面の極の全き合一をなすとすると、始めて即ち *brilliant*、燦爛たる開覚成佛が顯現するのである。しかしこの合一に達するには行すなはち時の無限の旋回を要する。ここに曾て述べた如く、本有體系における無作の本有即本覺即本行（または本業あるひは本用）といふ三者の先驗的融即關係が、經驗的現實に現れきたらねばならぬ。西田哲學的にいへば、いはゆる有るものと見らるものと働くものとの關係、また千古の昔すでにこの微妙の論理を道破せる天台哲學を以ていへば境・智・行なる三妙の關係、ないし予のいはゆる本有システムにおける有と知と用と、すなはち實在と認識と體驗との關係における先驗的原型相が、人格的自覺における現實經驗として實修實踐されねばならぬ。けにここにかの情熱の詩人的哲人ニイチエがツアラウストラに語りし如き、偉大なる *Tobemann* 「超人」の哲學がまた成立つを知る。

Oh meine Seele, ich hab' dich, Heute " sagen wie "Einst" und "Ehmal's" und über alles Hier und Da und Dort dein'n Reigen hinweg tanzen.

Oh meine Seele, ich gab dir das Recht Nein zu sagen wie der Sturm, und Ja zu sagen, wie oft er Himmel Ja sagt: still wie Licht stehst du und gehst du nun durch verneinende Stürme.

Oh meine Seele, ich gab dir Freiheit zurück über Ersehnthos und Unerschthos: und vor kennst, wie du sie kennst, die Wolken des Zukünftigen?

悠久なる時間の回廊もしくは進化の永遠なる雲梯の、ここ、そこ、およびかしこに於て、我れは輪旋の舞曲を舞ぜん、といふが如く、まことに時は實在の根本的範疇である、本佛の實在もまたされば時の問題をアルファとオメガとする、否その究極においてはつひに時を超えゆくのであるが、しかしまづ根本的に時間規定よりしてこれを論じ出ださねばならぬ。

南無妙法蓮華經

昭和十七年十二月十二日 天皇陛下 神宮御參拜の時刻に當り 帝都 佛舍利奉安の靈境において 立正安國 皇威宣揚 敵國降伏 人類救済のために 護法護國の大誓願を言上したるの後。

## 宗教と道徳

本 聖 院

明治時代の爲政家が、日本人は學校教育と道徳を以て品性を陶冶して行けばよい。背て宗教の必要はないといふ譯で、宗教所謂佛敎を蹴飛ばした、従つて知識階級の士女は、宗教殊に佛敎を顧みず、全然信仰は迷信地位にしか思はなくつた。併し少しく志篤い學者は「宗教も道徳も結局は一つである、要するに宗教は人間の本性に基いて道徳を説いたもの、人間が此世に於て正しい生活を爲すべき道を説いたもので、最後の目的は人間の到達すべき終局の道徳的理想を明かにするにあつた。乃至すべての宗教は、最後に最高の道徳を目的としてゐる。人類をして完全なる人格たらしむるといふことを目的としたものである。これが爲に佛敎では方便を説くけれども、方便は讀んで字の如く手段方法に過ぎない」といふことを申してゐるが、今一步進んで宗教と道徳の相違を明かにしないと、即ち宗教の尊嚴を知らず、信仰の偉力を辨へないと、日常仕事の上に何等かの嫌たらぬことになる。それは現實の世相を見ればよく解る。畢竟佛敎の中へは道徳が入れるるけれ共、道徳の中に佛敎は入れ切らないのである。

宗教ここでは佛敎に就て述ぶるが、佛敎は單に道徳のやうに現在だけを教へ導くものではない、人生はそんな單純なものであるまい、所詮現在をよく知るには過去を顧みねばならぬ、過去なくして現在はないのであるから、現在の示されてゐる事柄は、過去の時の種の実であり、又現在といふ言葉の下から夫れは一面過去となりつつ、他面將來に及んでゐるものであるから、未來といふことは遠くに考へないでも、明日も未來なれば、一刻後も一秒の後も未來である。だから明日の幸福を欲するならば、今日功徳を積むことである。因縁なくして果報はない。故に此の過去と現在、未來の三世一貫した明敎でない、眞の事柄は解らない。早い話が吾々の生れて來ることも、死後の問題も、教主釋尊に依つて始めて徹底して解決されたのである。かの孔孟の敎は聖なりといつても未だ不完全で、畢竟佛敎に來るべき道程であることを知つて戴きたい。

猶佛敎の方便といふことは、方便直ちに眞實であることを知らねば、ともに佛敎を語るの資格はない。思想問題の大切なこの時、心ある人は靜かに宗教信仰に先づ魂を染めてほしいものである。

御成道會 一つの世でも人に教を興へなかつたならば育て禽獸と稱はざらざらであらう、人文の向上は寔に教化にある。特に今の時、世界の人類に最高の明教を密與すべき極めて切迫した大事であるまいか。世界を擧げて興廢の岐る一處、かかつて教の如何にあるを痛感する。經曰、「この佛は、五濁の惡世に出てたまふ、所謂劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり」として時のにござり、本能のにござり、人間のにござり、思想のにござり、生活のにござり、一切衆生をして皆一佛乘に入らしめ、安穩快樂ならしめ給ふのである。故に釋迦牟尼佛は教主であると共に教主である。日蓮聖人は、「大恩教主釋迦牟尼世尊」とも「本師釋迦佛」とも仰せられて居る、この教主釋尊の難有い大恩を忘れてはならない。無量劫より已來、種々の方法を以て吾等を救護されつゝ來り、爰に又八相を示現して三千年前に御化導下さつたのであつた。その中に降魔成道といつて、誘惑と脅迫の魔敵句威力を盡して襲來したが、遂に童子の一毛だも驚動すること出來ないのみならず、その絶大の慈悲は能く正念圓滿にして、遂に臘月八日、明星將に出現せんと欲する時、柔舌滅已して大菩提を證得されたのであつた。我れは是れ如來なり、今世後世、實の如く之を知る、我れは是れ一切を知る者、一切を見る者なり、道を知る者、道を開く者、道を説く者なり」といふ權威ある言葉が發せらるゝ次第であつた。人々は是の道法を聞き、之に順應せば現世安穩にして後に善處に生じ、道を以て樂を受くるに到るが、智ある者は聞けば能く信解するけれども、無智の者は疑惑して永く惡

道に沈淪するであらう。惟へば此の降魔成道といふ意義は甚深眞實甚深である。

本部では、第一日曜六日十四時より、莊嚴された御成道前に於て、和賀、小西、本郷等の各位、團員有志と共に悉しく法味を奉じた後、河合氏の長講、よく御成道と大東亞開闢の意義を徹底せしめた。蓮華散會。

大東亞開闢一周年に際して、全國民は更に感激を新にし、一體一心國家の總力を擧げて大目的を達成せしめねばならぬ。然るに或る者は、眞目的が未だに全國民の間に正解されて居ないかのやうな口角を瀾らすに到つては實に沙汰の限りである。勿論山の頂上を眺むるにも幾多の道あるやうに、甲の側より往くもあれば、丙の道より行くもあるから一部分だけ見聞する時に誤解を生ずるのであるまいか。達人は大観すべきであらう。

七日曉天六時、本部御成道前に清信士女相集り、完全祈願、皇威宣揚と陣病或諸靈の御回向を營み、一同國民儀禮後、三大目標の講話にお互の實踐を期した次第である。

國民儀禮と作法が、常會等で順序作法に任々不統一の點を見るが、先頃中央教化團體聯合會から參考資料として新道の權威者により審議制定されたものを此機會に一二御紹介しておきたい。

- 儀禮
- 一、敬禮
  - 二、開會挨拶
  - 三、國歌斉唱
  - 四、勸語(詔書)奉讀
  - 五、祈念
  - 六、朗誦(御製・訓言・常會の誓・其の他)
- 傳達・報告・協議・懇談・講話・閉會挨拶

七、敬禮

作法

一、敬禮

1. 司會者の言葉 「一同敬禮」

2. 敬禮の仕方

イ、立禮の場合

ロ、坐禮の場合

ハ、坐禮の場合

ニ、宮城進拜

1. 司會者の言葉 「最初に宮城を進拜致します」 「一同宮城の方向にお向き下さい」 「宮城に對し率り謹んで進拜致します」 「最敬禮」 「直れ」

2. 最敬禮の仕方

イ、立禮の場合

ロ、坐禮の場合

ハ、坐禮の場合

ニ、祈念

1. 司會者の言葉 「次に靖國の神靈に對し率り、感誦の誠を捧げ、併せて皇軍將兵の武運長久を祈念致します」 「始め」 「終り」

2. 注意

イ、祈念の長さ

ロ、頭を心持ち前に下げ、眼を軽く閉ぢる。

ハ、約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

寸五分)とし頭は座面より約五種の處まで下げるのを度として止め、凡そ一息の後、徐に元の姿勢に復す。

多考

神宮進拜を併せ行う場合は何れを先にするか……前後を論ずべきものではないが、宮城進拜を先になすを妥當とする。

三、國歌斉唱

1. 司會者の言葉 「次に國歌を齊唱致します」

2. 唱ひ方

イ、國歌をうたふ時は姿勢を正し、眞心から實許の無窮を奏せ奉ること。

ロ、歌詞 歌曲を正確に唱ふこと。例へば「さよれいし」の場合、「さよれ」にて切らざるが如し。

ハ、詔書の終りに「各大臣副書」とあるは讀み上げざること。

四、勸語(詔書)奉讀

1. 司會者の言葉 「次に勸語(詔書)を奉讀致します」

2. 奉讀の注意

イ、御名御歷並に年號月日は音調を一段下げ明瞭に奉讀すること。

ロ、奉讀の最初に勸語(詔書)と讀み上げざることを。

ハ、詔書の終りに「各大臣副書」とあるは讀み上げざること。

五、祈念

1. 司會者の言葉 「次に靖國の神靈に對し率り、感誦の誠を捧げ、併せて皇軍將兵の武運長久を祈念致します」 「始め」 「終り」

2. 注意

イ、祈念の長さは五息(約十五秒)程度を可とす。

ロ、頭を心持ち前に下げ、眼を軽く閉ぢる。

ハ、約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀

土曜講座

約二ヶ月許り小林先生の御真例により、懸念御禮儀



# 統

# 一

法財人種  
統

一團發行

## 次 目

遺文に於ける五大要義(完結).....	本多日生
開目 鈔 講 話(承前).....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十).....	河合 陟 明
一念三千の眞意.....	本多日生
人格は最後の勝利.....	本 聖 院
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 二 年 八 十 四 第

統 一  
明治三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可  
昭和十八年十一月一日發行(毎月一日發行)

第五百七十四號

第四十八年 一月號

明治三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可  
昭和十八年十一月一日發行(毎月一日發行) 第五百七十五號